

男たちの秘密(2)

The Secrets of Men 2

田中純

Jun Tomika

エクスタシー的儀礼からの国家秩序の生成——
オットー・ヘフラー『ゲルマン人の祭祀秘密結社』

オットー・ヘフラーによる『ゲルマン人の祭祀秘密結社』
(一九三四)の前文はこう書き出されている——

この著作は、遠く離れているように見える対象を扱う。すなわち、ゲルマン人の死者神話、エクスタシー的な忘我状態、太古の時代に根ざしながら後世まで生き残っている戦士的政治結社、これらの結社の宗教的・社会的・歴史の意味、そしてドイツの民衆演劇の成立についてである。——こうした構成は恐らく不審の念を引き

起こすだろう。

この研究は、見かけのうえでは大変に異なっている歴史的对象が共通の根源をもつような領域を劃定し徹底的に究めるべく努めている。——その対象とは、祭祀的で共同体的な諸力が、分解不能な一体性のもとにおいてともに作用する生存形態のことである[1]。

こうした目的設定のもと、ヘフラーが先行する業績として挙げるのが、ハインリッヒ・シルツとリリー・ヴァイザーの研究であった。

この前書きでは、生者と死者との結びつき、とりわけ男性結社による英雄的かつデーモニックな死者崇拜こそが、ゲルマン的な生と文化の宗教的、道徳的、歴史・政治的な活

力の源である、という主張が繰り返されている。戦士の男性の結社に国家形成力を認めただ点にシルツの業績がもつ価値を求めているのと同様に、ヘフラーは、エクスタシーのただなかで行なわれる死者崇拜の儀礼こそが、生者たちと「彼らの死者たち」が一体化した超個人的共同体をもたらしのだとする。「彼らの」とあるように、この死者たちとは生者たちの祖先を意味している。

祖先たちとの超個人的共同体は幻想ではなく、「もつとも具体的な現実」であり、合理性に解消されない「デーモンの力(Demonic)」の浸透したこの陶酔的儀礼のみが、結束した集団と秩序を形成する。この場合、「エクスタシー(Ecstasy)」とは、あらゆる束縛の解消やカオス的なものへの没入ではなく、「死者たちへの義務」であるとヘフラーは言う。また、「デーモンの力」という言葉は、合理的な解釈から逃れる、死者との一体化を可能にする何かを指している。「ゲルマン人の祭祀秘密結社」第一部におけるヘフラーの探究は、この何かを明らかにすることへと向かう。

この第一部は「ゲルマン人の死者の軍勢——神話と祭祀」

と題されている。ここでは「エクスタシー」の秘密祭祀の反映としての荒ぶる軍勢(Wilde Heere)の伝説をめぐり、ゲルマンや北欧の民話、伝説、神話、言い伝え、風習、古文書記録などにおける、デーモニックな軍勢の記述が探索されてゆく。それらは前文で示された、死者たちと一体化した超個人的共同体をエクスタシー的儀礼のなかで実現する、戦士の男性秘密結社の実在を証明するための探究であり、ヘフラーの博識を發揮した多面的な考証である。ここでは主題である「死者の軍勢」をめぐる神話の「究極的な意味」について、ヘフラーが語っている部分を引いておこう——

デーモンに憑かれた人物における、この「自己の外に出る」(An Auser-sich-Gerathen)「引用者註：すなわち、「エクスタシー」は、カオス的なものへの転落ではなく、死して不死となった者たちの結束した共同体、つまり、はかりしれない社会的・国家的エネルギーの源への参入なのである。そして、この過程は「偶然的」でも、バラバラな個々人の体験でもない。そうではなく、われわれはここで、普遍